



ミスターパートナーインタビュー

私たちに力をくれた国



イギリスに魅せられたワケ

All Roads Lead to U.K.



幼い頃イギリスに憧れ留学し、後々イギリスでビジネスを立ち上げた方。古き善きものを大切にするイギリスに魅せられて、イギリスを舞台とした小説を上梓した方など、今回紹介する3人はイギリスに触れたことによって、その後の生活が変化した。一体彼らは、イギリスのどこにその魅力を感じたのだろうか。

企画・構成・編集／ミスターパートナー編集部
文／笹塚ジントロ(p42)、岡本美衣(p44)、乾雅美(p45)



イギリスの学生を北海道の浦河町へ引率するなど、日英文化交流ソサエティでも活躍した。

「一言で言うとうと日本が窮屈だったんでしょね。今のうちに、女性に選択がある時代じゃなかったです」
学生時代、学級委員や生徒会に選ばれるほど活発だった富岡さん。中学と高校時には英語弁論大会の全国大会まで進んでいる。そのとき特訓してくれたのが、英国大使館に勤務経験のあるイギリス英語を話す先生で、いつかはイギリスへという思いが、この頃から芽生えたのだという。
「きっと、何か人と違ったことがあったかっただと思ってる」
そう当時を振り返る。まだポンドが500円を超える時代で、今のように気軽に語学留学をする風潮もなかった1976年。21歳の大学生だった富岡さんは初めてイギリスの土を踏んだ。ロンドンを走る車は思ったよりみずほらしく、道行く女性たちは皆、痩せていた。
1年間だけだからと親を

ット郊外へ移り住む。ロンドンのように日本人がいるわけではない。周囲はすべてイギリス人だけの田舎町だったが、人も物も考え方も洗練されていると感じた。「本当のイギリスは、ロンドンじゃなくて田舎にあるのだと思いました」
1985年、英国四天王寺学園という学校がイギリスに設立されることになった。大阪の私立校が進出してきたのだ。学校の立ちあげや運営に参加することになるのだが、このとき日本からの学生の世話をする体験をしたことが、現在の留学支援事業の展開に繋がってくるのである。

「仏教系の学校でしたのでね、日本の心に久々に触れることができました。どこか(英国に)かぶれていたところもあったので、日本に引き戻してもらった。この出会いには、とても感謝しているんです。もう英国暮らしのほうが長くなっただけで、心はやはり日本にあるのだということを再認識しました」
そして99年、学校の撤退と前後して、当時のスタッフ3人で「Mitsuba Associates」を立ち上げた。以来10数年。現在はスタッフ7名で年間700人もの日本人の学校探しからホームステイまでのコ



1989年頃から競馬に惹かれ、以来、乗馬と競馬をこよなく愛す。息子さんも乗馬を行っている。

「女性はおとなしく結婚」だった70年代、イギリスはそれ以外の生き方を提示してくれた

カントリライフこそ英国の真髄

しばらくしてイギリス人男性と結婚した富岡さんは、ロンドンからニューマーケ

説き伏せて実現させた、イギリス初留学だったのが、語学学校やカレッジで学びながら、ロンドンの日本人コミュニティで支え合いながら暮らす日々は2年半にも及んだ。
「お金はなかったけれど、若かったから貧乏は平気でした。見るもの聴くもの、とにかく珍しくて、それを毎日親に手紙を書いて伝えていましたね」
この国がよほど性に合ったのだろう。一端帰国したもの、半年後はもうイギリスへ舞い戻っていた。それから30数年……通訳になりたかったという留学当時の夢を叶えつつ、彼女は今もイギリスで暮らし続けている。



2004年、日英教育シンポジウムで英語の同時通訳を務めた富岡さん。

「女性であっても自分の意見を表に出すことで、一人の人間として存在できる。逆を言うと、意見を言えなければ認められない。少なくとも日本のように、おとなしくしていることがよしとされないといい場所があったのかもしれない」
最後に、この国に魅せられたのですか？
「女性であっても自分の意見を表に出すことで、一人の人間として存在できる。逆を言うと、意見を言えなければ認められない。少なくとも日本のように、おとなしくしていることがよしとされないといい場所があったのかもしれない」

富岡典子(とみおかのりこ)
1955年茨城県生まれ(57歳)。1976年、21歳の時に英国に2年半留学。一時帰国し半年後に再渡英。学校運営や通訳など様々な職を経て1999年に、留学斡旋事業の「Mitsuba Associates」設立。競馬と乗馬をこよなく愛す。



Mitsuba Associates

ミツバ・アソシエイツ

イギリスをはじめ、カナダ、アメリカ、オーストラリアなど様々な国への留学やホームステイをサポート。親身な対応で利用者のリピート率も高い。年間約700人の方の留学の夢を叶え、今年で開業14年目。実際の体験談は本誌連載「英国大人留学」を参照のこと。

④4a Rosemary House, Lanwades Business Park, Bury Road, Kennett, Cambridge CB8 7PN
☎+44(0)1638 751 508 (日本語)
<http://www.mitsuba-associates.com/>
<http://www.facebook.com/MitsubaAssociates>



本誌の「英国大人留学」連載でもお馴染み、日本人の英国語学留学やホームステイのコーディネーターを行う「Mitsuba Associates」。その代表が富岡典子さん。彼女がイギリスに渡ったのは今から30数年前のこと――。

在英留学斡旋会社 Mitsuba Associates 代表

富岡典子さん

伝統ある緑茶園が紅茶づくりに挑む

英国最大の食品専門審査会「The Great Taste Awards」で、2年連続で二つ星を受賞した「富士山紅茶オリエンタルブレンド」が、日本茶の本場・英国で認められたお茶を製造したのは、創業120年余の静岡の茶園だと知れば驚く人もい

「静岡御殿場市の茶園「荒井園」5代目の荒井誠さんが紅茶作りに挑戦したきっかけは、「紅茶も作ってみたら」という英国好きの奥様の一言だったという。ビール好きで英国を度々訪れていた荒井さん。「お茶



「富士山紅茶オリエンタルブレンド」(袋入840円)。他にも、新しく開発した生姜紅茶や茶飴などでも賞を受けた。

作りに携わる者として、一日のうち何度も紅茶を飲む英国人のライフスタイルは、とても良い文化だと思っていました」と語る。一方で日本茶のお茶文化をみると、日本茶、特に玉露を飲む機会が減ったという人も多いのではないだろうか。「ならば、現代日本人の生活にも合う紅茶を作ってみようと考えたのです」

日本には明治時代以降として茶葉の輸出を目指していた歴史があり、当時からの研究資料が蓄積されている。荒井さんは「静岡県農林技術研究所 茶業研究センター」などに通い、品種や製造法の勉強を始めた。また先輩技術者からの指導も仰いだという。

こうして荒井さんは理想の紅茶の味を固めていった。「日本の軟水で淹れて美味しく、日本人の味覚にも合い、ヨーロッパの方にも納得してもらえ美味。英国はミルクティーが主流だから、ミルクを入れて美味しく飲むためには、華や

かな香りがありながら、コクのある味わいの紅茶がいいのではないだろうかと思

ったのです」。茶葉の品種の選定やブレンドの比率など完成したを経て2010年に試行錯誤の

の「富士山紅茶オリエンタルブレンド」だった。ヨーロッパの審査員から絶賛「The Great Taste Awards」は、世界で約1600団体、約7500点が出品される英国の食品審査会だ。シェフやフードライター、バイヤーなど食のプロが審査員となるこの審査会は、最も信憑性が高いと注目を集めている。商品化の後、推薦があり11年の同審査会に出品。見事二つ星を受賞した。ほどよい渋味とキレの良い味。ミルクを入れても香ばしく、日本の紅茶のお手本といえる。と、審査員から称賛を浴びたと。翌年受賞し、2年連続受賞という快挙を成し遂げた。

だが、荒井さんは満足しない。「日本の気候を活かした栽培と、職人技を組み合わせた、新たな茶も作りた



郷愁誘われる英国の景色

全てはそこから始まった。精霊や魔物、夢想と現実、そして戦争と平和、緑美しい田園地帯、イギリス・コッツウォルズを舞台に繰り広げる冒険ファンタジー『秘密の鍵』。ピアノ講師として働きながら、この作品を書き上げたあかまつようこさん。ストーリーと共に、コッツウォルズの風景も存分に楽しめる。よほどこの地に詳しいのだろうと思いきや、意外なことに「ご本人は一度もイギリスを訪れたことはない」とい

英国的な雰囲気のあるものに魅かれていました。特に、『不思議の国のアリス』などファンタジーには夢中でしたね。それから父も母も、毅然として気品のあるイギリスの紳士淑女のような感じの人でした。たま

たまとめていたアンティーク品もイギリスのものが多くて、でも飛行機が苦手なので……」。実際に訪れたことはなかったが、イギリスのファンタジーやアンティークに無意識に魅せられ、自分の根底には「イギリスが常にあるのだ」と気づいたとい

ファンタジーやアンティーク無意識のうちにイギリスに魅せられていた

世界大戦後のイギリスを舞台に、3人の少年少女が織りなす壮大なファンタジー小説『秘密の鍵』(文芸社)を上梓したあかまつようこさん。物語の舞台裏と創作の秘密に迫る。

作家・ピアノ講師

あかまつようこさん

いたものと、自身の記憶がびったりと合致し、それを表現することを後押ししてくれているように聞こえました」。こうして、平和への祈り

田園風景、ヒドコート・マナー・ガーデンを造園した退役軍人ローレンス・ジョンストンの平和への願い、父から聞いた悲惨な戦争の事実、子どもたちの遊んだ野原……。今まで思い描いて

と詩情に満ちた世界は完成したのだ。独自の手法で物語を編み出すあかまつさん。10年程前から兵庫県のある森の中に小屋を建て、執筆活動もそこでやっている。英国の田舎を彷彿とさせるこの場所、今後どのようなお話が生まれるのか、今から楽しみだ。



森の小屋の寝室は、小さな階段を昇った先の小さな入り口から入る。英国の家の屋根裏部屋のような空間で、自分だけの秘密の場所的な雰囲気。こうした所にも「物語のヒントがある」とあかまつさん。

生活のなかに紅茶文化が根付く英国に惹かれた日本の茶師

「英国の人にも納得してもらえる紅茶を」とオリジナルの紅茶を開発した荒井誠さん。なんと、その紅茶が英国の権威ある品評会で賞を受賞したというのだ。

荒井園 茶師 荒井誠さん



すね」と言う。「英国の茶葉の消費量は日本の2〜3倍といわれおり、お茶が生活の中に溶け込んでいると感じます。伝統的なモノづくりを大切にす

る国とも感じる。そんな国の方に、日本の伝統技術で培った製法で作られた紅茶を、ミルクメイトーとしてお取り寄せしてもらいたいのですね」



ミルクティーのおいしい淹れ方 茶葉の量はポットにつき1杯+カップにつき1杯で計算。沸かしたてのお湯を注いで5分蒸らす。低温殺菌牛乳を湯煎で温めてカップに入れた後に紅茶を注ぐ。「ミルクが先」スタイルが荒井さんのオススメ。ミルクと紅茶の割合は5対5がベスト。高温のお湯で淹れるほど茶葉からカテキンが抽出されるため、高い香りが出るものの渋味も強くなりやすい。渋味と香りを穏やかにしたい人は低温で淹れるのがオススメとのこと。



荒井園

1888年創業の老舗茶園。1930年には献上茶の栄誉を賜り、以後、茶栽培・加工技術の向上に努めている。近年、紅茶の栽培に乗り出し、英国の「The Great Taste Awards」で二年連続で二つ星の賞を受賞している。

静岡県御殿場市御殿場 80 0550-82-0244 http://www.araien.co.jp/



ヒドコート・マナー・ガーデン

約1万2千坪という広大な敷地を持つ17世紀築のマナーハウスを中心とした英国式庭園。米国人ローレンス・ジョンストンが第一次世界大戦従軍後、戦争で傷ついた心を癒すため40年以上の歳月を費やして造園したもの。美しさもさることながら、彼の平和への願いが「秘密の鍵」のテーマとシンクロして、物語が織りなされる地として最高の舞台となっている。

@Hidcote Bartrim, near Chipping Campden GL55 6LR +44(0)1386 438 333 http://www.nationaltrust.org.uk/hidcote/

あかまつようこ

1950年、宮城県生まれ。宮城県立宮崎南高等学校在学中に小説「不思議なほら穴」を書いて話題になる。現在は大阪に住み、ピアノ教室指導歴30年。その傍ら、執筆活動も行う。著書に「妖精ブルグリの森」(文芸社)などがある。自身のブログ「あかまつようこの幸せになるためのファンタジー」でも、短編ファンタジーを連載公開中。 http://ameblo.jp/laurencejohnston/



秘密の鍵

イギリスコッツウォルズの謎 第2次大戦後、戦いの爪痕残るロンドンやコッツウォルズを舞台に、家族と生き別れた13歳の少年レオとその親友トマス、少女のローズが繰り広げる冒険ファンタジー。

あかまつようこ著 1,470円(税込) 文芸社刊